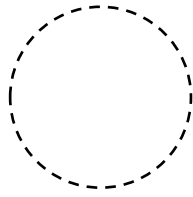


1. 「陰陽」二元のはじめ (図- 1) ～中国古典『淮南子』参照^{えなんじ}

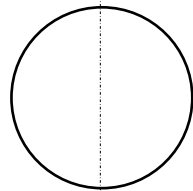
図- 1 a



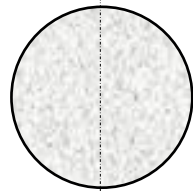
原初の宇宙は、混沌、未
発・未分の世界であった。

図- 1 b

[天]

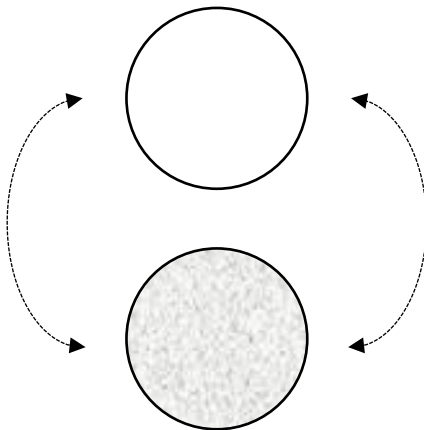


[地]



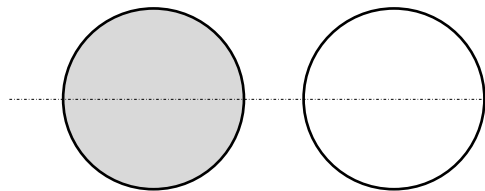
清陽^{せいよう}なるものは薄靡^{はくび}して
天と為り
重濁^{じゅうたく}なるものは凝竭^{ぎょうけつ}して
地と為った。

図- 1 c



天地の間にうごめきが生
じた。
軽い澄んだ陽気がまず天
となり、重く濁った暗黒
の陰気が地となった。

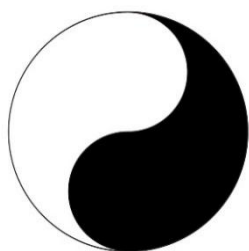
図- 1 d



[陰]

[陽]

天の陽の集積が「火」とな
り、火の精が太陽 (日) と
なった。一方、地の陰の集
積が「水」となり、水の精
が太陰 (月) となった。



総称して陰陽二元

原初の宇宙を一つの円で記述した混沌、未発・未分の世界については、以後、「無極、太極、太一、^{いつ}合一、^{いつ}単一、^{いつ}一」と表現するが、無分別智の世界と同値、何もかもが、森羅万象、万物が溶け込んだ究極の理想郷を意々ます。

2. あらゆる「もの（事物）やこと（命題）」に内包する『陰・陽』の意味合い
重要な前提があります。

一つ目は、陰と陽は、性質を真逆とするが、それぞれの価値・重要度・重み（密度）においてまったくの同等である、完全な平等性を持つとすることです。

二つ目は、一つ目の言い換えで、「一＝二、二＝一」の関係、つまり、一つは陰陽二つで成り、かつ、陰陽二つ合わせて一つである、とします。一つに陰陽同時存在です。

陰陽二元説とは、前記図－1のように陰陽二元がそこに生まれただけでは次の発展段階はありません、陰陽二元は正反対・真逆の性格を帯びている、しかし別々に存在して睨めっこしているのではなく、かつ、森羅万象一つの「もの・こと」に必ず同居しているという考え方です。一つの『もの・こと』をどこまで細分化しても陰陽ワンセットが表れます。この基本から万象は発展して行くとする考え方です。

その1；火と水

陰陽二元基本の一つ目は、火と水で象徴する。太陰（月）に元々『水』があるから「月＝水」と配当したのでは無い、元々は天空の両眼とする「日と月」があって、まずは日（太陽）に火を当てたことから、対極視点に立てば、燃える火（太陽・日）の反対である燃えないものは何かとなれば、水であり、かつ、太陽の反対となれば太陰、すなわち月として配当したのであろう、と推察できます。今の科学の時代にあっては、月に水は無い、有る訳は無い、ということであるが、万事・万物の運行を説くに当って最適採用した陰陽五行思想において、「月＝水」と配当したのであろう。これらを図(表)－2のとお

燃える 燃やす	火	陽	太陽（日）	燃える 燃やす	火＝日（太陽）
↑↓	↑↓	↑↓	↑↓	↑↓	↑↓
燃えない 冷やす	水	陰	太陰（月）	燃えない 冷やす	水＝月（太陰）
図(表)－2 a					

西洋風に見ればヘーゲルの弁証法――もの（事物）やこと（命題）は、「否定」を通じてこそ、新たな・より高次の「もの・こと」へと再生成、再生産されるというプロセスを、「正（テーゼ）」「反（アンチテーゼ）」「合（ジンテーゼ）」という言葉を用いて説明する。――に通じます。

その2；この宇宙における陰陽二元要素・対抗因子について分類・配当したものを属性毎に図(表)－5に整理しました、陰陽の基本関係の一例です。

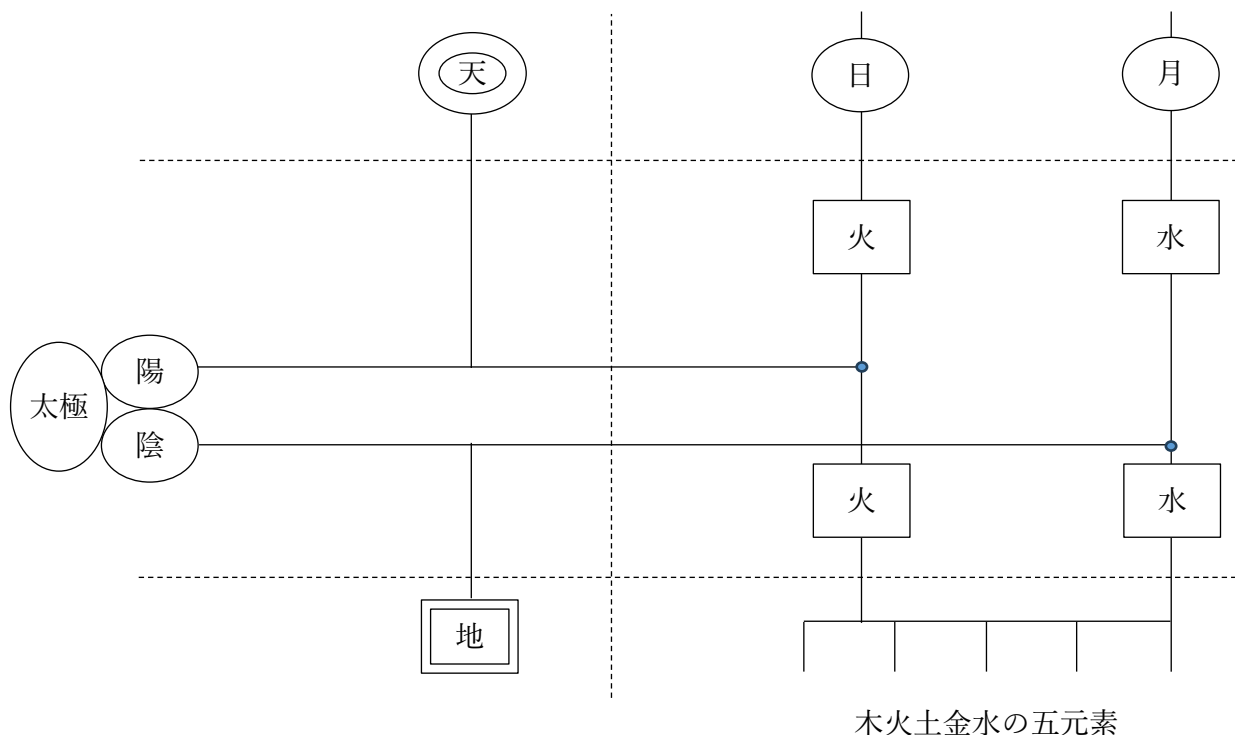


図- 2b

この陰陽配当表は、対比・対照するものを選択して対と見做し、一方に陰を、他方に陽を当てたものであります。本表の配当は永久に限定・固定されるものではなく、「一つが二つ、二つが一つ」のとおり、右表において、例えば女は陰、男は陽と配当したが、女にも陰陽があって、男にも陰陽があるということです。これを陰中陽有り、陽中陰有りと意々ます。

その3；さて、この陰陽二元説についてももう少し展開して見ます。世の中の諸々の現象、森羅万象の活動は変転極まり無く、人間の心（思念も感情）も絶えず変化し、一定していません。そのことは相互に相対的に真逆の性質を有する『陰』と『陽』の二元がせめぎ合い（反発・吸引、膨張・収縮）をしているという観方です。その陰陽はあくまでも単一に内包する対極・両極であり、不離一体・表裏の相待・共存関係にあるとします。これは太古からの宇宙に貫徹する原理原則、自然の理法とされます。

私は簡潔に言う場合は、「陰陽相対（相待）性原理」と称します。対は対立・反発の対です、待は招待・吸引の待です。この両方が同時に働く・蠢くのです、しかし、そこに留まらず、つまり、ただ矛盾葛藤するだけでなく、必ず、調和・協和を求め「中する」（中庸・中和化）働きが自発——自然発励します。

特徴を列挙します。

- 1) 「反発から対立」です、一方がその支配圏の拡張、覇権力などの膨張の動きで攻めれば、他方は収縮の圧力を受けることになり均衡（パワーバランス）が崩れることから、今度は他方側がその支配圏を盛り返すべく膨張力が働く。それはやがて対立・衝突に発展する。それらの事象は相手方を「否定」、「排除」の行動と裏腹となる。
- 2) 「吸引から相待・依存」です、陰が存在し得るのは陽が存在するからであり、陽がなければ陰はない。陽が存在し得るのは陰が存在するからである、陰がなければ陽はない、一方だけが存在することは出来ない。つまり、両方が同時に存在してこそその物種（始まり）である。それらの事象

は相待・依存とも裏腹となる。

- 3) 「消長と循環」です、季節の冬から春・夏へは「陰消陽長」の過程、夏から秋・冬へは「陽消陰長」の過程で、陰陽の対立と依存の関係は静止状態ではなく、動的な平衡状態とみる。一方に固定することは無く、変化は永遠に続くとし量的な変化の過程とみる。
- 4) 「交代・転化」です、陰窮まれば陽に転じ、陽窮まれば陰に転じるという関係性は、質的な変化の過程とみる。片方への偏在は無く、攻守処を変える状態か永遠に続くとする。
- 5) 「併存」です、「陽中陰有り、陰中陽有り」「陰中陽有り、陽中陰有り」です、それぞれに対立の種子を内蔵しつつ「一つ」であるということは矛盾ではなく、次の新しい変化（命）の兆しを内包しているとする。
- 6) 物理学の作用・反作用と酷似している。

3. 「一極（全一）二元の三律構図ワンセット」（図-6）

陰陽説は、「一極（全一）二元論」とも言われ、言い換えれば「陰陽同根」（同根＝一つ）であります、すなわち、両性具有であります。陰陽の原初は「一つ、^{いつ}一」です。正と反が同根・同時進行なのです。よって「一つ」そのものには、もちろん陰陽、色付けはありません。宇宙の森羅万象のもの・ことの動静に作用と反作用が同時に生じています。世の中の万事について、77億人が寄って集って^{たか}最高の知恵を結集して出し切った結論（判断）と雖も「唯一絶対」というもの・ことはありません、なぜならば、「人間も陰陽同根に付き対極の種子を有すもの、陽中陰有り・陰中陽有り、万物流転」だからで

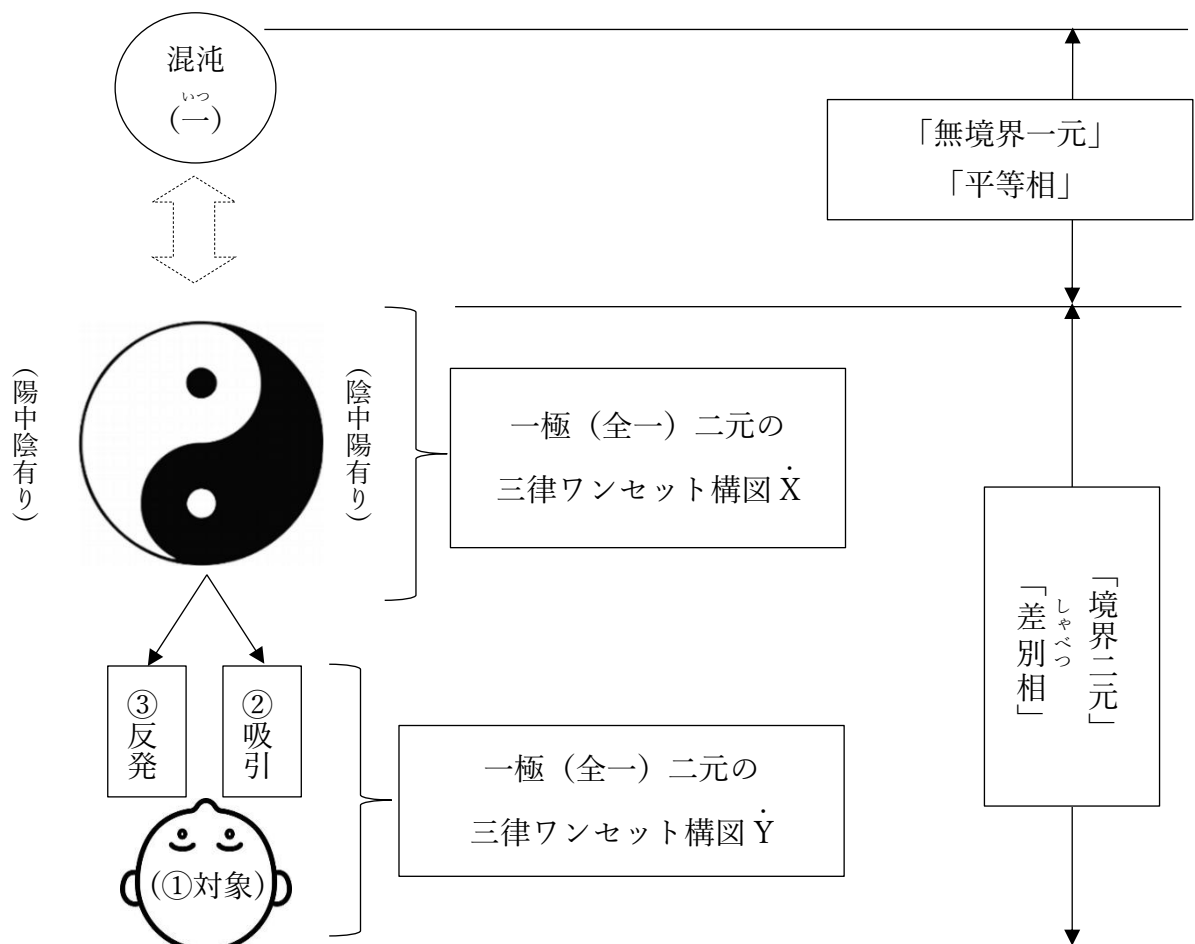


図-6

す。陰陽粒子の入れ子状態です。その上で、この世のもの・ことは「一極（全一）二元の三律ワンセット構図 $\dot{X} \cdot \dot{Y}$ 」と私は名付けています。「分別知」と「無分別智」の世界とも重なっています。

図－6中、魚眼太極図においては、一極の $\dot{1}$ と陰陽二元の $\dot{2}$ を以って、三律の $\dot{3}$ とします。

図－6中、①②③においては、 $\dot{1}$ つの意識の対象には必ず吸引と反発の両対極が両律します。

例えば、通常意識の中で<前者>「あの人が大嫌い」と思えば、同原理より対極概念の「あの人が大好き」が裏側（無意識層）に自立・内発（自発）されます、つまり、人には『①対象とするあの人と②好き（陽）と③嫌い（陰）』の3要素が瞬時に同時並立します。「大嫌いなあの人と絶対に会いたくない」と思うと、反対のその嫌いな人と思いがけない所で遭うはめになります。逆に <後者>「あの人が大好き」という思いが強まった場合です、これにも同原理により対極にある「大嫌い」が無意識層（裏側）に自発します。上記同様に『①対象とするあの人と②嫌い（陰）と③好き（陽）』の3要素が同時並立です。つまり、やがて相手の欠点・対立点が気になるようになります、「素晴らしい人だと思っていたのに、悪魔が隠れている！」となり、嫌いな人になってしまうのです。

すると前者に返って、その嫌いになった人とどこかで遭うはめになります。いずれにしても、何かの対象を意識した瞬間に「好き・嫌い＝二元（陰陽）」が自発・自律し、「一極二元の三律ワンセット構造」が無意識層の中で瞬時に成立するということです。対象のない処に陰陽二元は立ちません。これは自然界の法則、天地の成せる技ですから人間が制御出来るものではありません。どっちにしても、どちらか一方に偏ることの戒めがあります。

4. 陰陽の実相

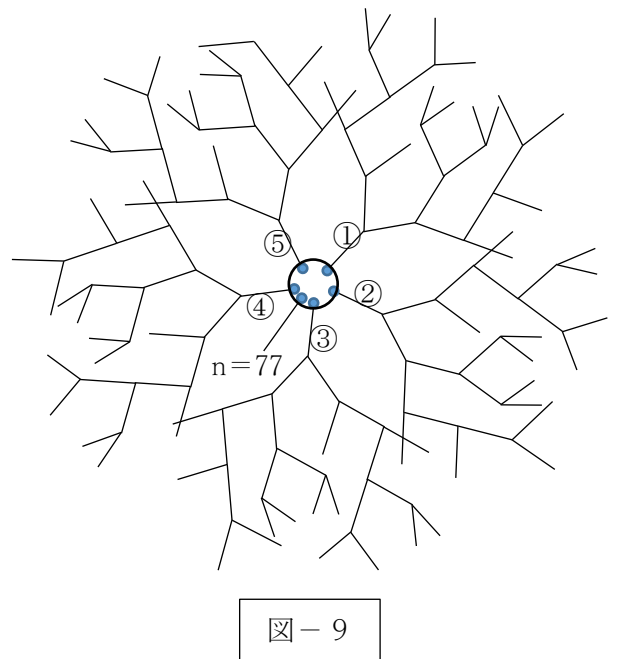
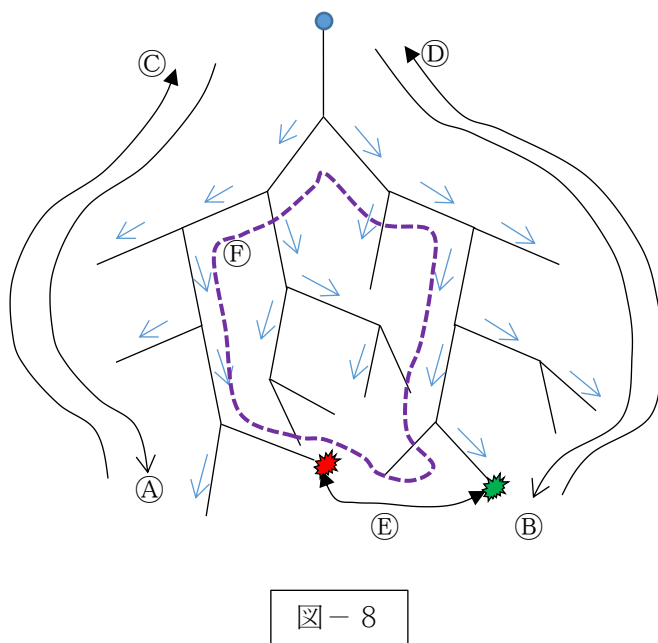
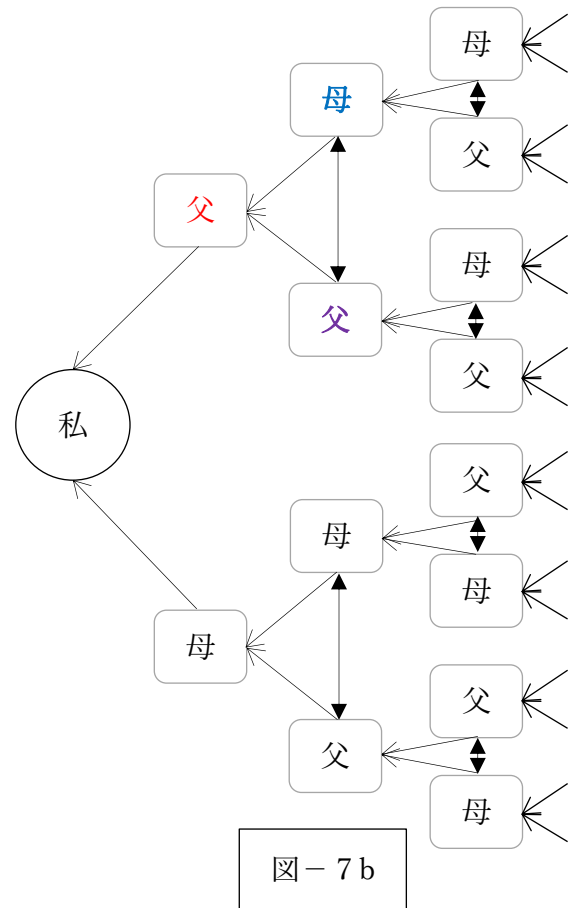
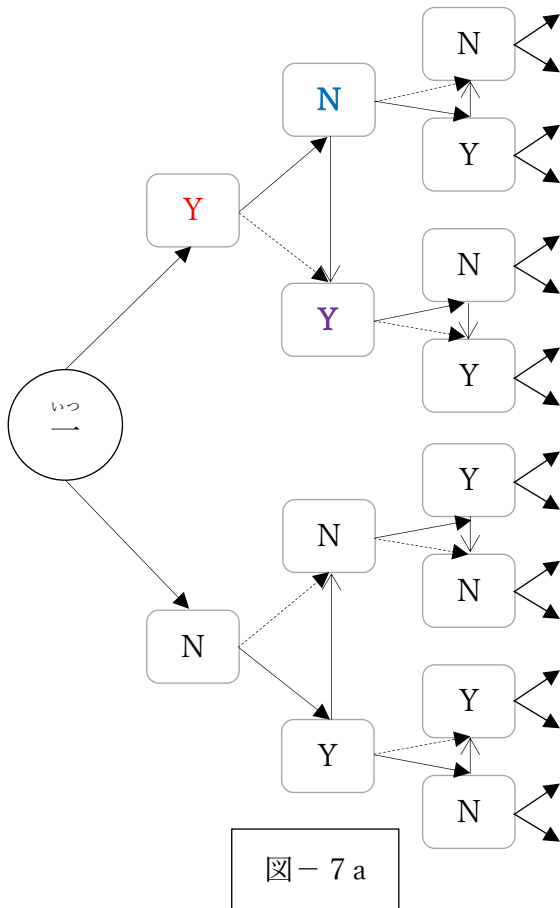
一つの「もの・こと」は、すべて、ことごとく陽の持つ際限無き分化発展作用と、陰の持つ際限無き求一還元（ $\dot{1}$ を求めて元 $\dot{2}$ に還る）作用は、同時進行のエネルギーを内包しています。

その1；陽の特徴である分化発展作用は、人間の想像力・生命力に活動性（エネルギー）を注入せしめる働きです。いわば個性重視を希求する胎動です。しかし他方で、細分化・尖端化・末梢化、混乱の危惧が生じ、これが過ぎれば対立葛藤や弱肉強食等の暴力性を生む危険を伴います。

分化発展作用の具体的イメージは図－7のようになります、陰＝N＝母、陽＝Y＝父として表示し、一例を説明します。「 $\dot{1}$ 」からYとNの二元が生まれ、Yには陽中陰有り $\dot{N}$ が自生します、 $\dot{N}$ が自生すると、今度はその $\dot{N}$ に陰中陽有りYが同時発生します。あるいは、Yには賛・否（Y・N）が、Nにも賛・否（Y・N）同時発生と見ても同じです、この動きが全てに当て嵌まります。

一方で、陰の特徴である求一還元作用は、根源に含蓄統一しようとする働きから敬愛・愛敬、尊貴に憧れる理想精神を育む働きです。いわば平等重視を希求する胎動です。しかし他方で、慎重・静観・消極化の危惧が生じます。ところで、これが過ぎれば傍観・萎縮・停滞から発展阻害を生む危険を伴います。

その2；自然現象および人間の実相は、その陰陽の蠢き――すなわち「同根」「往来」「交合」の三動態が宇宙原理ということです。陽の作用は図－5の再現なき発展性を発揮し、図－8のとおりになります、一人の人間の中でさえ、一つの考え方には賛否分岐の考え方が表れ、どちらかに決断したとしても、それにまた、賛否分岐の考え方が表れます、 $\textcircled{A}\textcircled{B}$ 際限なく分岐点が表れます。分かれ方は賛否のみならず善悪、上下、前後、左右・・・無限に表れます。しかし、時には、 $\textcircled{C}\textcircled{D}$ 一に戻ろうとする求一還元作用が動きます、これが陰の作用です。さらには、同図 $\textcircled{E}$ のようにブレークスルー衝突が起こります、



すると、⑥のように閉塞場（空間）においてループ・循環を形成し、蒙昧するようになり、内に自己内矛盾、自家撞着が生じ精神疾患に陥る嵌めになります。これらの事象は不規則・ランダムに発生します。これが正常なのです。このような人間が集まっている地球（図-9）です。

その3；ここではそれぞれの過度進展の様相についてです。芳村玲好著「安岡正篤」（三五館）より要点を整理します。——陽に偏すると、必ず活動に伴う疲労があり、疲れる、くたびれる。外に伸びて分化する、伸びて分れば分かれるほど、つまり、分化するほど、換言すれば先端化、末梢化すればするほど、根幹の力は弱まっていく。陽は陽に偏するにしたがって、創造力、変化力を失い、本来の力が弱くなっていく。生命力が希薄になって、繁栄は混乱に変わり、分裂は破滅になる。すなわち疲労し、

混乱し、生命力が希薄になり、破滅していくというのが陽の弱点です。――陰に偏すると、分化しない、繁栄・発展しない、つまり委縮する、固定することになる。萎縮し、固定する結果は、やはり死滅するということになり、これが陰の弱点です。

その4；同類反発というが、「同じ穴の^{むじな}貉」「一丘之貉」「近朱必赤（朱に交われば赤くなる）」の「同類感応」もあるではないか、という意見が必ずでます。しかし、陰中陽あり、陽中陰ありで、満つれば欠ける、欠ければ満、であり、「同類感応」は絶対に固定・長続きしないのです。

=====

【 ま と め 】

あらゆる「もの・こと（森羅万象、考え方）」は陰陽二元セット、表裏一如であることの理解が大前提です。「全一（太極・太一）」から2・3・4・5・・・への①分化発展と「②帰一還元（造語）」は常に一体、すなわち分化発展の観方と帰一還元の観方は、常に自然自発的に往復・往来・交渉するものなのです。したがって、「もの・こと」に対して矛盾・同着を感じる、輻輳を感じ蒙昧するというのは、①または②どちらかに拘泥・固執しているからです。逆に、蒙昧から脱却するためには、①と②を線路のように同時並行上で走らせる、考え、想像を同時並行的に巡ることです。

(end)